ISSN 0917－4729

北方民族博物館だより

No. 103

左）H2.127.2　銅製ナイフ/アサバスカ・インディアン/カナダまたはアラスカ
中央、右）H3.10銅製ナイフとアザラシ皮製鞘/アサバスカ・インディアン/
カナダまたはアラスカ/1900年頃

柄頭がY字状になっている銅製のナイフは、ユーコン川流域の住人を中心として多くのアサバスカ・インディアンの社会で用いられていた。同様のナイフは少数ながらも北西海岸のトリンギットや一部のイヌイト/エスキモーでも確認できる。これらのナイフは主に狩猟で用いられ、柄に棒を取り付け、熊槍（くまやり）としても利用されていた。伝統的にはアラスカ、カナダで採取される自然銅を利用し製造され、アサバスカ・インディアンの銅加工技術は周辺の他民族と比較して高い水準にあったとされる。

目次　Contents

1　表紙　銅製ナイフ
2－4　第31回北方民族文化シンポジウム網走　環北太平洋地域の伝統と文化 1　サハリン
5　講座「北海道博物館紀行『羅臼町郷土資料館』」／講座「ロシア・アムール地方の言語」
6　はくぶつかんクラブ・講習会「カラフル・ストローでヒンメリ作り・フィンランドの伝統装飾品ヒンメリ作り」／講習会「サラニプ（編み袋）作り」
7　講習会「はじめてのアイヌ刺繍」／講習会「白樺樹皮で作るバスケット」
6　INFORMATION

北海道立北方民族博物館
Hokkaido Museum of Northern Peoples

第31回北方民族文化シンポジウム網走

環北太平洋地域の伝統と文化
1　サハリン

2016. 10. 15-10. 16

北太平洋を取り囲む地域は、自然環境や生物資源だけでなく、文化的にも類似性や共通性が指摘されてきました。今回のシンポジウムではサハリンを対象地域とし、内外から10名の研究者にお越しいただき、多様な視点からその先史文化、歴史、民族文化を検討しました。

以下に各発表の概要を紹介します。

＊　＊　＊

第１部：サハリンと日本列島の先史文化（座長：加藤博文氏（北海道大学アイヌ・先住民研究センター）、コメンテーター：O. シュービナ氏（サハリン州郷土博物館））

「サハリンの考古学―現在の成果」A. ヴァシリェフスキー氏・V. グリシェンコ氏（サハリン国立大学）

1947年以降、サハリン島では旧石器時代から中世まで1709の遺跡が確認され、約60が発掘されました。その中には32の文化系統、文化集団、考古学的文化があり、いくつかは併存していました。これらの結果から、新石器文化化をはじめとする新たな文化の形成を沿海地域における適応と位置づけました。

最近の研究成果として、サハリン中部における旧石器時代のチャート加工場跡とステップ・ツンドラの動物相の研究、クリール（千島）列島における石刃石器群の確認、縄文文化の北限の確定、先史時代・歴史時代初期における長距離交易の確認、土城の時期・起源の確定などが挙げられます。これらにより、我々は世界システムのなかで、東アジアの周縁地域における異なるレベルの社会間の相互作用を明らかにし、サハリン島中世史に新たな概念を提供しています。

A. ヴァシリェフスキー氏

V. グリシェンコ氏

「サハリン／日本列島における新石器文化の環境適応」福田正宏氏（九州大学）・V. グリシェンコ氏（サハリン国立大学）

サハリンと北海道は亜寒帯から温帯への移行帯にあたるため、この地域の新石器時代の研究により、狩猟採集民の適応環境形態を知ることができます。新石器／縄文時代の北海道は、①定着的採集民社会システムの北方拡大、②適応困難な環境からの撤退、③新環境に適応するための技術や社会関係の獲得や強化、という点から説明できます。①は更新世／完新世移行期のベーリング・アレレード温暖期にはすでに認められ、②は特に北海道東部・北部で認められます。③については、サハリンー北海道間での関係性強化が幾度かありました。しかし、北海道より寒冷なサハリンには、異なる生業や社会構造の変遷過程がありました。そのため、地域の生態系を超えた拡大は不要で、両者間で考古学的文化は融合しなかったと考えられます。

福田正宏氏

「紀元一千年紀前後におけるサハリンと北海道の先史文化交流」熊木俊朗氏（東京大学大学院人文社会系研究科）

サハリンは大陸と日本列島の先史文化の交流ルートとして注目されてきました。サハリン経由で北海道に流入した大陸の先史文化として、１）後期旧石器時代の細石刃石器群、２）縄文時代早期の石刃鏃石器群、３）７世紀頃のオホーツク文化が確認されています。

熊木俊朗氏

２）以降の約5000年間、北海道とサハリンの交流は途絶え、その後縄文時代末～続縄文文化期初期に再開しました。この時期、北海道ーサハリン、サハリンー大陸間の交流はありましたが、大陸からサハリン経由で北海道に達するような交流は現在のところ確認されていません。また、この時期のサハリンには、複数の文化が存在することが明らかになりました。この時期の文化要素や人間集団の動きの実態解明が今後の重要な研究課題です。

第２部：サハリンアイヌの歴史と文化
（座長：中田篤（北海道立北方民族博物館））

「モンゴルのサハリン島への侵攻とアイヌ」
中村和之氏（函館工業高等専門学校）

モンゴル軍は1264年に初めて、20年後の1284～1286年に再度骨鬼（くい）（アイヌ）を攻撃しました。モンゴル帝国のクビライ＝カアンは、1260年に東方三王家の支持を得て大カアンに即位しました。その直後の骨鬼攻撃は、東方三王家に対する論功行賞と考えられます。一方、1280年代のモンゴル中央政府は、アムール河下流域に対する直接支配を拡大していました。つまりこれら二期の攻撃の目的は異なり、1280年代以降、モンゴルの直接支配がサハリン島に及ぶようになったと推定されます。

モンゴル帝国のサハリン進出により、13世紀後半には、アムール河流域・サハリン・北海道・本州を結ぶ交易ネットワークが成立し、アイヌはサハリンから北海道に至る環日本海地域の北方域で交易の主たる担い手となりました。

中村和之氏

「17～19世紀における南部サハリンのアイヌによる天然資源利用システム研究の情報源としての地名学」
I. サマーリン氏（サハリン州郷土博物館）

アイヌ語地名は、17世紀に日本人による最初の地図が作成されて以来知られるようになりました。最古の名称は1644年の正保年代の地図に記されていたもので、岬や河川、谷、河岸・海岸、儀礼の場や神が住む地域にも名前が付けられていました。

こうした地名は、ここ数百年間の南部サハリンにおける天然資源の利用に関する情報をもたらしてくれます。例えば、イトウやシロザケが豊富に獲れる河川、アイヌがニシンやキュウリウオを獲った場所、クロテン、クマなどを狩猟した地域、クジラが座礁した場所などを示す地名、オヒョウやオオイタドリなど有用植物に関する地名が残されています。

I. サマーリン氏

第３部：サハリン先住民と日露関係（座長：中村和之氏）

「19世紀後半における日露関係とサハリン島の諸民族」
麓 慎一氏（新潟大学教育学部）

19世紀後半、サハリン島のアイヌは日本側の漁場で使役されていました。1853年ロシアのサハリン島南部進出に伴い、アイヌの中に日本の支配を拒否する動きが現れましたが、翌年ロシアはクリミヤ戦争の影響によってサハリン島から撤退します。その後、日本側はサハリンが日本の影響下にあることを示すため、サハリン先住民、特にアイヌに対する支配を強めていきます。

クリミヤ戦争後、ロシア側はサハリンへの再進出を試みますが、日本がサハリン諸民族に対する影響力を強化したことにより、しばらく日本側が優位な状況が続くことになりました。日本とロシア、そしてサハリン島の諸民族の関係の転換点は、クリミヤ戦争と日露の領土交渉にありました。

麓 慎一氏

「サハリン先住民族の文化と観光網走」
田村将人氏（東京国立博物館）

1905～45年、サハリン南部の日本領では、先住民に対する同化政策が進められました。その結果、1945年以降の日本人引揚者には、樺太アイヌ約1200人の９割、ウイルタおよびニブフ約400人の１割が含まれ、その多くが北海道に定着しました。

網走では、オホーツク文化と移住してきたサハリン先住民の文化が結びつき、観光資源となっていきます。樺太アイヌの木偶をヒントに観光土産「ニポポ」が作られ、また

「オロチョンの火祭り」（当初サハリン先住民が出演）は主要行事となりました。

しかし、現在網走では当事者抜きで「北方民族」のイメージを利用している状況にあります。「観光資源としての先住民文化の活用」と「マイノリティーの歴史・現実の理解」を同時にどのように引き受けていくかを考える必要があります。

田村将人氏

第４部：サハリン先住民の伝統文化と言語
（座長：白石英才氏（札幌学院大学）、コメンテーター：J. ヤンフネン氏（ヘルシンキ大学））

「植民地時代・ポスト植民地時代におけるサハリン先住民の文化変容」E. グルズジェワ氏（ヘルシンキ大学）

サハリンには異なる言語を話す複数の先住民集団が暮らしてきました。19世紀に始まった日本とロシアによる植民地化によってサハリンの景観は徐々に変化し、急激な経済発展と開発、大量の非先住民の移入は、先住民の伝統的生業や文化、言語の衰退をもたらしました。ソ連崩壊は先住民のさらなる周辺化、貧困化を招きましたが、一方で民主化と自由化により、先住民の権利や文化復興を求める社会活動が活性化しました。

先住民言語の復興は悲観的状況ですが、2015年フィンランドの研究者と地域活動家により、先住民言語を日常語として復興させるためのプロジェクトが開始されました。前途は多難ですが、先住民自身に意欲があれば希望はあると信じています。

E. グルズジェワ氏

「サハリン先住民の言語接触とウイルタ語の方言特徴」山田祥子（北海道立北方民族博物館）

サハリン先住民は異なる言語を母語としつつも互いに交流し、周辺諸民族の交流を仲介してきました。20世紀後半にはロシア語への言語交替が起こり、先住民言語は急速に衰退しました。

サハリン先住民間の言語接触に関して、当初は諸言語の系統関係について、1980年代以降は単語や文法の借用関係について研究がおこなわれてきました。ウイルタ語については、サハリンのニブフ語やアイヌ語との間で、語彙や文法の借用・類似がいくつか指摘されています。また、19世紀中頃以降にサハリン北部に移住したエベンキの影響により、エベンキ語からウイルタ語北部方言への影響がみられ、このことがウイルタ語の方言特徴の一部を形作っていると考えられます。

山田祥子

＊　　＊　　＊

今年は国際シンポジウムにふさわしく、サハリンを中心に海外から７名の方にご参加いただきました。多くの研究分野にまたがるテーマでしたが、皆様のご協力により、熱心な発表と議論がおこなわれました。

また本シンポジウムの関連事業として、10月６日（木）、ヨンドイ・ネルグイ氏、アマースレン・ドルジパラム氏をお招きしコンサート「馬頭琴が奏でる遊牧民の調べ」（共催：NPO法人北方アジア文化交流センターしゃがぁ）を開催しました。

馬頭琴を演奏するヨンドイ・ネルグイ氏（右）と
アマースレン・ドルジパラム氏

（学芸グループ　中田篤）

講座　北海道博物館紀行

羅臼町郷土資料館

2016. 9. 17（土）

講師　天方 博章氏（羅臼町郷土資料館　学芸員）

北海道内の博物館を紹介いただく「北海道博物館紀行」。今回は羅臼町郷土資料館について、学芸員の天方博章さんからご紹介いただきました。羅臼町郷土資料館は羅臼町の歴史・文化・自然について紹介している博物館です。

天方博章氏

羅臼町といえば、世界自然遺産知床、羅臼昆布などで有名です。本州からの移住がはじまった明治９（1876）年以降、羅臼町は漁業で発展してきました。この理由として、山地がほとんどを占め、平坦な土地が少ないこと、そして、海底が急に深くなる地形であり、サケ・マス・ニシン・タラなどさまざまな魚種が豊富に生息していることなどがあります。羅臼町は「海拓（かいたく）の町」といえます。

資料館については、代表的な展示資料である国指定重要文化財「北海道松法（まつのり）川北岸遺跡出土品」を中心に解説いただきました。松法川北岸遺跡は、７世紀から８世紀にかけて、松法川河口近くの砂丘上に営まれたオホーツク文化の集落跡です。昭和57（1982）年に発掘調査が行われました。

この遺跡から出土した資料には、土器・石器のほか、多数の炭化した木製品・樹皮製品がありました。木製品や樹皮製品に関しては、通常の遺跡環境では腐敗して残ることはありません。しかし松法川北岸遺跡では、出土した住居が火災に遭い、製品が蒸し焼き状態になり炭化して残りました。木製品のなかには、熊の頭部を彫刻した容器など、貴重なものも含まれていました。このため、出土資料の重要性が認められ、平成27年に国の文化財に指定されました。

炭化した木製品は平成24年まで復元作業が続けられ、現在は見やすい状態で資料館に展示されています。講座のなかでは、熊の頭部を彫刻した木製容器のレプリカをお持ちいただき、詳しく解説くださいました。

熊の頭部が彫刻された容器レプリカを手に解説する天方氏

（学芸グループ　種石 悠）

講座

ロシア・アムール地方の言語

2016. 9. 18（日）

講師　風間　伸次郎氏（東京外国語大学教授）

東京外国語大学教授の風間伸次郎さんを迎えて、講座「ロシア・アムール地方の言語」を開催しました。風間氏は約30年間に100回以上の現地調査を行い、主にロシアのアムール川流域で話されているツングース諸語の音韻・文法・語彙（い）などの研究をされてきました。なかでも言語学研究の基礎資料となる口語テキストの収集に努め、『ナーナイ語テキスト』『オロチ語基礎資料』等、数多く刊行されています。

そうした研究活動を行うなかで、調査に協力下さる方のご自宅や、その土地にある博物館等で言語だけではなく物質的な要素を目にする機会も多く、民俗学的な情報についても検討を加えたいと考えるようになったそうです。具体的には、10余りにわかれるツングース諸語を話す人々の用いる皮なめしや食器、狩猟の道具など「民具」の名称を対象にします。その名称を『ツングース諸語比較辞典』などによって調べ、全ツングースに共通する語があるのかないのか、あればどんな祖形に遡るのか、元の形や意味は何か、一部のツングースに偏っている語彙はどのような地域的あるいは生業的偏りをみせているかを確認します。古い語の形を遡ることで、どのような暮らしをしていたのかを再構築したり、周辺からとりいれた文化要素が何なのかという歴史を明らかにできると考えています。

課題としては、民俗学的な分析は言語学者だけでは難しいので、博物館も含めた他分野からの協力が必要なこと等にふれました。調査時に撮影された写真数百枚の上映を行いましたがとても全ては終わらず、続編を期待する声が多くきかれました。

風間伸次郎氏

（学芸グループ　笹倉　いる美）

はくぶつかんクラブ/講習会

カラフル・ストローでヒンメリ作り/フィンランドの伝統装飾品ヒンメリ作り

2016. 9. 24, 25

講師：山本　睦子氏（ヒンメリ作家）

ヒンメリはフィンランドに古くから伝わる伝統装飾品のことで、天を意味するスウェーデン語が語源になっています。

昨年当館で展覧会を開催されたヒンメリ作家の山本睦子さんを迎え、小中学生と一般対象のヒンメリ講習会を開催しました。

完成した作品を持つ参加者

ヒンメリは、もともとは長い冬の転換点である冬至祭りに飾られた豊穣の願いがこめられたモビールですが、近年はクリスマスの装飾品としても扱われています。

ヒンメリは、ライ麦の茎（わら）を材料にしています。国内ではなかなか作品作りに向くライ麦の茎が手に入らないため、山本さんはご自身でライ麦を育てています。そうしたなか、もっと気軽に楽しめるように、ペーパーストローとマスキングテープを重ね、ペーパーオーナメントを組みあわせるヒンメリを考案されました。

自然素材であるライ麦に近い形で、土にかえってゆくものをというこだわりのストローに、用意されたマスキングテープを貼ってゆきます。次にストローを決められた長さに切って、糸を通してヒンメリの基本である正八面体を作ります。小中学生向けでは正八面体を一つ、一般向けでは二つ作りました。

次に、オーナメントを切って、ヒンメリと糸でつなぐと完成です。

ライ麦に比べストローは裂けにくい分作りやすいようでした。マスキングテープの貼り方やオーナメントをつける位置に個性がでて、素朴なライ麦のヒンメリとはひと味ちがったヒンメリができあがっていました。

参加者を指導する山本睦子氏

（学芸グループ　笹倉　いる美）

講習会

サラニプ（編み袋）作り

2016.10.29

講師：山田　美郷氏（アイヌ民族博物館伝承課）

一般財団法人アイヌ民族博物館伝承課の山田美郷さんを講師に迎え、サラニプづくりの講習会を開催しました。

北海道アイヌの編み袋のことをサラニプ（saranip）といいます。大きさや形にはさまざまあり、ござ織りの道具を使って作るものもあります。材料にされるのは、シナノキやオヒョウの樹皮が多く、特にシナノキが編みやすいといいます。

今回の講習会では、梱包用の麻紐を使いましたが、講師がシナノキとオヒョウの内皮から作った糸を用意してくださったので、シナノキの糸のほうがオヒョウから作った糸よりもはりがあることを、実際に触って確かめることもできました。

サラニプは底から編んでゆくために、少し上から吊った状態で作業をします。あらかじめ準備しておいた縦糸に、横糸二本をよじりながらかけて、ぐるぐるまわるように編んでゆきます。

最初は形が安定しないので、参加者は編むのに苦労していましたが、次第に慣れて調子もあがってゆきました。

よい長さ（深さ）まで編めたら、縁の部分を処理し、次に別に用意しておいた四本の糸を編んで肩紐（ひも）をつくります。

少し隙間のあくタイプのサラニプでしたので、その隙間が均等になるように目打ちで整え、肩紐を本体にしばりつけるとできあがりです。

講習会が順調にすすむように、講師がさまざまな工夫をしてくださっていたので、大人にまじっていた小学生の参加者もサラニプを完成させることができました。

参加者を指導する山田美郷氏

（学芸グループ　笹倉　いる美）

講習会

はじめてのアイヌ刺繍（ししゅう）

2016. 11. 12

講師　西田　香代子氏（(公財)アイヌ文化振興・研究推進機構アイヌ文化活動アドバイザー／(公社)アイヌ協会優秀工芸師）

（公財）アイヌ文化振興・研究推進機構より派遣いただいたアイヌ文化活動アドバイザーの西田香代子氏の指導により、アイヌ刺繍（ししゅう）の講習会を行いました。

講師の西田香代子氏

講師の西田氏は、阿寒湖温泉アイヌコタン（釧路市阿寒町）で民芸品店を営みながら、伝統的な文化や刺繍技法を習得されました。現在までに数多くの刺繍作品を制作し、博物館資料の複製も手がけてきました。当館でも西田氏の作品を収蔵しています。

本講習会では、まず最初に、西田氏が製作された壁かけを常設展示室で観覧し、アイヌの代表的な刺繍技法について解説いただきました。その後、チンジリ（布地に直接糸で刺繍して文様をほどこした衣服）の製作に用いる刺繍の技法をつかって、大きめサイズのコースターを作りました。

材料には濃紺の木綿反と刺繍糸を使いました。まず、表地の文様を刺繍で作ります。今回の文様はイケマの実とつるをモチーフに西田氏がデザインされました。文様の曲線部分の刺し方（いわゆるチェーンステッチ）は比較的単純で、慣れた方はすいすいと針を運んでいましたが、角の折り返し部分や、糸を換える部分は講師の手ほどきを受けながら注意深く刺していました。

文様部分の刺繍を終えたら表地を裏地と重ね合わせ、四辺を縫い合わせます。その後、別の色の糸で先の縫い目をつなぐように刺し進めて四辺を一周させれば、作品の完成です。

参加者の作品

今回の作品はコースターでしたが、紐（ひも）を取り付ければ壁飾りにも、バッグなどに縫い付ければポケットにもアレンジできます。刺繍の作業を早く終えた参加者は、自分で文様をデザインする方法も学ぶことができました。このように西田氏は、型どおりに針を運ぶばかりでなく、作品に自分のアイディアを生かす楽しさも教えてくださいました。

参加者のなかには刺繍経験者が多く、刺繍のなかでもアイヌの技法とはどのようなものか興味津々といったようすでした。刺繍をとおしてアイヌの文化に触れる貴重な機会となりました。　（学芸グループ　山田　祥子）

講習会

白樺樹皮で作るバスケット

2016. 11. 19

講師 山辺　朋子氏（白樺細工作家）

東シベリアで、白樺樹皮細工について学ばれてきた山辺朋子さんを講師に迎え、バスケットづくりの講習会を開催しました。

今回の講習会では12本の白樺樹皮の帯を使うタイプのバスケットづくりに挑戦しました。

あらかじめ半分の帯は、講師が厚み調整をしてくださっていましたので、これを見本にして残り半分の帯を調整することからはじめました。

１cm幅に切り出してある白樺樹皮は、何層かになっています。これを編みやすい厚さになるまで剥いでゆきます。適当な厚みになったところで、椿油を樹皮にしみこませてなめします。この油は椿油でなくてもよいということで、ロシアではヒマワリ油が使われていたということでした。

材料がそろったところで、いよいよ編みの作業にはいります。格子状に四本を組み、残りの帯も順番に加えていきます。マット状になった四隅をクリップでとめ、次に立体になるように側面をたちあげてゆきます。

四面が編み上がったら、縁の部分を外側に折り、帯の長さがなくなるまで編みすすめます。

白樺樹皮のバスケットをただ編むのではなく、樹皮の厚み調整やなめしも行ったことで、白樺樹皮に対する理解も深まったようです。一見硬くて折れそうに思える樹皮が、しなやかになることに驚かれていました。

やさしい講習会ではありませんでしたが、講師の丁寧な指導に全員が本体に目処（めど）をつけることができました。

参加者を指導する山辺氏

（学芸グループ　笹倉　いる美）

平成28年度企画展 ボレアルフォレスト（北米針葉樹林）の狩猟民―アサバスカ・インディアンの暮らし―

アラスカからカナダ北西部にわたる広大な北方針葉樹林帯に暮らすアサバスカ・インディアンの生活を紹介します。アサバスカ・インディアンは広大な森林の中でヘラジカやカリブーやカンジキウサギといった動物たちの狩猟や漁労により暮らし、動物達と強い精神的な繋がりを築いてきました。

本企画展ではアサバスカ・インディアンの伝統的な暮らしをワナやナイフ、ヤスなどの狩猟、漁労の道具、美しい刺繍が施されたヘラジカ皮のジャケットやブーツ、ミトンに代表される様々な服飾文化、また現代にも通じるビーズ細工などの工芸品をもとに紹介します。また現地を調査している研究者達が撮影した写真や映像も用い、皆様を北方針葉樹の深い森の中に招待します。

■会期：平成29年２月４日(土)～４月２日(日) 観覧無料
■会場：北方民族博物館・特別展示室
■主催：北海道立北方民族博物館
■協力：原ひろ子氏（城西国際大学）、山口未花子氏（岐阜大学）、近藤祉秋氏（北海道大学）
■関連事業：２月５日(日) 10:00-11:30「ビーバーってどんな動物？動物園の現場から」
講師：北村健一氏（東京動物専門学校校長）
３月19日(日) 10:00-11:30 「ユーコンの先住民カスカの狩猟文化と世界観」
講師：山口未花子氏(岐阜大学助教)

ヘラジカ皮ジャケット

平成28年度ロビー展・オホーツクシリーズ⑩「北の状景から」

オホーツク地域の文化的活動を紹介・発信する「オホーツクシリーズ」。記念すべき第10回目は、この時期恒例となった写真展「北の状景から」です。

網走市やその周辺で活動するアマチュアカメラマンの作品により、豊かな自然や人びとの日常生活、イベントの風景など、オホーツク地域の魅力を切り取った一コマを紹介します。

■期間：平成29年１月７日(土)～１月26日(木) 観覧無料
■会場：北方民族博物館・特別展示室
■主催：北海道立北方民族博物館

INFORMATION

行事報告

◆９月３日(土)、講習会「オホーツク文化のトナカイ角彫刻を作る」（講師：種石悠学芸員）を開催しました。

彫刻をする参加者

◆９月10日(土)、はくぶつかんクラブ「北方の植物で染め物作り」（講師：濱名亜璃紗解説員）を開催しました。

染め物をしたバッグを持つ参加者

◆10月８日(土)、はくぶつかんクラブ「簡単カメラ作りと楽しい映像」（講師：野口泰弥学芸員）を開催しました。

手作りカメラで撮影を行う参加者

◆11月３日(木・祝)、「第８回はくぶつかんまつり」を開催し、衣装体験やモルック大会を行いました。

ポートアルバーニ・ファンクラブの皆様によるカフェコーナー（はくぶつかんまつり）

◆11月26日(土)、はくぶつかんクラブ「バスケット作り」（講師：濱名亜璃紗解説員）を開催しました。

調査報告

◆９月９日(金)-10月２日(日)、中田篤主任学芸員がサハ共和国で現地調査を行いました。

◆10月５日(水)-10月12日(水)、能取岬西岸遺跡（網走市）にて発掘調査を行いました。

北方民族博物館だより
No. 103

平成28(2016)年12月22日発行
編集・発行　北海道立北方民族博物館
〒093-0042 北海道網走市字潮見309-1
Tel 0152-45-3888　Fax 0152-45-3889
e-mail：tonakai@hoppohm.org
http：//hoppohm.org
指定管理者
一般財団法人北方文化振興協会